

---

# 二人の気持ち

奈森さくら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二人の気持ち

### 【Nコード】

N8368R

### 【作者名】

奈森さくら

### 【あらすじ】

元に戻った新一君と志保ちゃんの物語。

## 第一話（前書き）

感想お待ちしています

## 第一話

「……初めまして、だよな」

「……この姿ではね」

阿笠博士の家のリビングに立ち尽くす二人の男女。男の方は、初めて見る彼女の姿に呆気にとられ全身に何度も上から下へ視線を走らせている。女の方は、その痛いぐらいの視線を感じながら、男の視線を直視出来ず僅かに頬を染めて俯いていた。

「いや、哀君。綺麗じゃのう、まるで女優さんじゃ」

「……やめてよ。変なお世辞は」

いや、あながちお世辞ではない。まさしく彼女はモデル体型。世の女性が何とも憧れるプロポーションである。先日購入した白のワンピースから見える白い肌がまた美しく映えていた。

「ほら、新一も何か言ったらどうじゃ」

新一はかなり困惑した様子を見せる。初めて見る彼女の大人の姿に、本気で圧倒され、思わず見とれてしまっていたからだ。こんなにも美人だったとは。ふと、下から見上げる彼女と視線がぶつかり新一は頬を赤らめた。

「まあ、なんつうか……。綺麗、なんじゃねえかな」

これが精一杯だ。これ以上は恥ずかしくて言えない。

「……………あなたまで、変なこと言わないでよ」

彼女の顔は、新一以上に赤く染まっている。互いにその顔を直視出来ない状況の中、先に口を開いたのは志保だった。

「ほら、早く彼女のところにも行きなさいよ。私なんか、もう用はないでしょ？」

「……………えっ、あっ、ああ」

半ば弾き出される様に新一は阿笠宅を出た。

新一が去ったあと、博士が志保に近づき声をかける。

「哀……………。いや志保君。新一には、伝えたのかね？」

志保は小さく首を左右に振った。

「……………いいのかね？」

「……………いいのよ。元々、伝えるつもりじゃなかったんだから。それに彼が彼女と上手くいけば、この気持ちも、直に忘れられる筈だわ」

そう言つて地下室へと消えていった志保を、博士はただ無言で見つめていた。

## 第二話

新一と志保の二人が元の姿に戻ってから三日。新一は帝丹高校に復学し、以前の生活を取り戻し始め、志保は博士の友人が所長を務める研究所でアルバイトとして働き始めて、宮野志保としての第二の人生を歩みだしていた。

しかし実を言うと、新一はともかく志保は当初、元の体に戻るつもりは無かったのである。彼女は彼女なりに考え、灰原哀として新たな人生を歩むつもりでいたのだ。確かに灰原哀には仲間も居る、居場所もある。志保としては灰原哀のまま生きていくほうが幸せだったのかもしれない。しかし、結局彼女は宮野志保に戻ることを選んだ。解毒剤を飲む前日まで、戻らないつもりだった彼女の気持ちを一変させたのは、あの気障な名探偵である。

\*\*\*

「……本当に、これで戻れるんだよな」

「ええ。100%の確率で、工藤新一の体に戻るし、二度と江戸川コナンになる事も無いわ。完璧な解毒剤よ」

「……………そっか」

三日前、哀に呼び出されたコナンは、そこでAPT-X4869の解毒剤の完成を聞かされた。組織壊滅から一週間後のことで、もう少しばかり時間がかかると踏んでいたコナンは少々驚く羽目になる。

「……ほら、早く家から着替え持ってきて、戻る準備しなさい」

「ああ。あつ、でもよ、急にコナンが居なくなったら、面倒くさいことになるんじゃない……」

「安心して。もうある程度の根回しはしてあるから。博士に協力してもらってね」

「……へえ、知らなかったな。まあ、とにかく何時戻っても大丈夫って事だな」

「……ええ」

その後、一旦着替えを取りに戻り工藤新一復活の準備を整えてから、ふと何気なくコナンが哀に聞いた。

「なあ、お前はどうすんだ？」

「……なにが？」

「お前は戻らねえのかって聞いてんだよ」

「……私は、戻らないわ。今のまま、灰原哀として新しい人生を送るつもりよ」

「……そうか」

何故か寂しそうな顔をするコナン。気になった哀が聞いた。

「何なの？」

「あつ、いや。まあ、お前が決めた事だから反対はしねえけどさ。俺としちゃ、宮野志保に会いたかったなって思ってたよ」

「……えっ」

「ほら、俺まだ宮野志保のお前に会った事ねえじゃんか。だから、実はちよつと楽しみにしてたりしてたんだけど、まあしゃあねえか」

「………」

たったそれだけの言葉で、彼女の気持ちは一変してしまった。確かに哀自身、最後まで志保に戻るかどうか悩んでいたのだ。原因は新一にある。元の体に戻らなければ、新一の側にはきつと居られない。宮野志保に戻れば、新一の側に居れる可能性は少なからずある。

ほんの1%に満たない可能性かもしれない。それでもやはり、自分は新一の傍に居たい。その為には灰原哀の体は不釣り合いだ。

「……私、戻るわ。宮野志保として、しっかり生きる」

こうして二人は、元の体に戻ったのである。

### 第三話

午後五時に研究所でのアルバイトを終えた志保は、そこで知り合った真田春香と共に米花町に新しく出来たというケーキ屋へと向かっていた。

春香は志保と同じ18歳。とても社交的で、二週間前に研究所へやって来た志保にも積極的に話し掛けるなどして、何時の間にか友人の間柄になっていた。真田春香は言うなれば、吉田歩美をそのまま成長させたような性格である為、志保が心を許すのも頷けなくはない。この日も甘党である春香が志保をしつこくケーキ屋に誘い、志保が根負けしたといった具合であった。

「あつ、あつた。あれだ」

数メートル先に目標の店を発見した春香が指差して言う。店は落ち着いた感じの、ケーキ屋というよりは喫茶店といった感じで店内の客の数もまばらであった。

「静かで、いい雰囲気ね」

「うん。もっとガヤガヤした感じだと思ったけど、何か落ち着ける」  
すると丁度注文をとりに来た女性店員が

「昼間は、ガヤガヤしてるんですよ。夕方になって、落ち着いてきたんです」

愛想良い店員だ。二人は注文を済ませると、談笑を始めた。

\*

二人の話はだいたいが春香の、彼氏が出来ないだとか、バイト先の誰かが嫌いだとかいう、愚痴を志保がただ黙って聞くといいスタイルで続けられる。たまに春香に返事を求められた時だけ返事を返すのだ。志保から話を切り出すことは、普通に考えてまず無い。この日も春香は相変わらずの愚痴り放題。どうやら、昼間研究所で他愛もないトラブルで女性所員と喧嘩したことが、まだ頭にきているらしく今日はそれ以外のことは話題にはあがらなかった。

「私、あの人だいつきらい！！明日から、無視してやろうかな」

普段は優しく社交的な春香も、機嫌を損ねるところなる。こういうところは歩美には全く似ていない。志保はそんなことを考え、ふと苦笑いを浮かべた。

ちょうどその時、店にまた客が入って来た。若い男女二人組だ。志保はその二人を見て、唾を飲み込んだ。

「へえ、いい感じのお店」

「本当だな」

帝丹高校の制服。その二人に志保はよく見覚えがある。

「……………工藤君」

間違いない。新一と蘭だ。

見たくなかった。一番見たくなかった光景が、今自分の前に広がっている。

二人は志保達から離れた席に座り、何やら楽しそうに話している。胸が締め付けられる志保。もう我慢の限界だった。

「……………春香、帰りましょう」

「えっ？どうしたの、志保？」

急に言われて面食らうのは春香。志保は既に立ち上がっている。

「あっ、ちよっ、ちよっと志保」

春香は残っていたケーキと紅茶をそのままに慌てて志保を追った。

志保は新一達の方を振り向くことなく店を出ていった。

## 第四話

「おす。腹減った」

午後七時を少し廻った頃、新一は帝丹の制服のまま阿笠邸に来た。新一は夕飯をこうして毎日あやかりに来る。新一自身、別に料理が苦手だという訳でもないのだが何故かこうして食べに来るのだ。ただ志保としては理由はともかく、毎日こうして顔を合わせる事が出来るのは少なからず喜ばしいことで、うんざりした態度を表面上は見せながらも、食事はしっかり三人分用意するのが習慣と化していた。

だが、この日は何時もと事情が違った。志保は、今日は新一に会いたくなかったのだ。会ったらきつと、蘭とのことを話される。美味しいケーキ屋に二人で行ってきた。

そんなこと、志保は聞きたくなかった。

「あれ博士、あいつは？」

何時も自分が来た時には居る志保が、この日は居ない。博士に聞くと、志保は友人と夕飯を食べに行ったという。

「なんだよ、あいつそんな事言ってなかったのに」

「……き、急に決まったんじゃよ」

「……ったく。まあ、しゃあねえか。じゃあ、今日は帰るよ」

新一が出て扉が閉まると博士は深い溜め息を一つ。それから間を置かずに、地下室から足音が上がって来た。

「……………ありがとう。博士」

「……………志保君」

つまり、博士は志保の嘘に付き合ったということだ。今日だけは、新一とは会いたくない。蘭とデートしているところを思わず目撃し、そのデート話を新一からされたりしたら志保はきつと耐えられないだろう。

しかし、かといって志保には、自分が作る食事を食べにきてくれている新一を追い返すことなんて出来ない。だからわざわざ博士に頼んで、新一に帰ってもらったという訳だ。

（……………バカね、私。これじゃ、逃げてるだけじゃない）

いくら自分でそれを自覚しても、新一の気持ちが自分に向く筈はないという現実を前にすると、どうしても逃げたくなる。

自分の気持ちは届かない。

届くわけがない。

志保は、目の前に現れる現実にただ目を背けることしか出来なかった。



## 第五話

志保が新一と蘭のデート現場を目撃してから一週間後、この日の朝志保は隣の工藤邸のチャイムを鳴らしている。理由は何時も朝夕に来る新一が朝食を食べに現れなかった為。この日は平日で、当然のことながら新一は学校へ行かなければならない。米花町二丁目から帝丹高校は徒歩十五分弱程度かかるのだが、普段の登校開始時刻を既に二十分も過ぎている。このままいけば間違いなく遅刻するだろうと心配した博士が志保に新一を呼びに行かせたのである。

志保は、きつと寝坊して朝食を食べる時間が無いと踏み、もう学校に行ったのだろうと言うのだが、万が一まだ寝ていたりしたら大変だからと博士に半ば追い出される様な形で今志保は、工藤邸の前にいる。

「……出ないじゃない」

やはり、もう行ってしまったのだと帰ろうとした時、チャイムのマイクから物音が聞こえた。志保が再び呼び掛けると、蚊の鳴くような声で返答が聞こえた。音量は小さいが、間違いなく新一の声だ。

「工藤君？あなた何してるの、遅刻するわよ」

「……………」

「ちょっと、聞いてるの？工藤君」

明らかに様子がおかしい。志保は一度阿笠邸に戻り、工藤邸の合鍵を手にとると、慌てて中に入った。

「……工藤君」

新一はチャイムの応対口の所で、壁にもたれ掛かる様に座っていた。薄目を開いて、志保の存在を確認すると小さく笑みを浮かべた。

「ちよつ、ちよつと。どうしたのよ」

「……………なんか、風邪ひいちまったみてえだ。昨日から、何かだるかったんだけどよ」

「すごい熱じゃない、何で病院行かなかったのよ」

「……………しゃあねえだろ？蘭の奴が、買い物に付き合ってくれって言っから」

一瞬胸の内に湧いた不快感を志保は無視して新一を何とか起き上がらせると、二階の自室へと運んだ。何時の間にか新一は、眠りに耽っていた。

\*

何か話し声が聞こえる。うつすらと開いた目には見慣れた天井が映し出された。

「ええ、だから所長にもそう伝えてくれる？ええ、じゃあお願いね」

携帯電話をパタンと閉じると志保は新一の方に向き直り、視線が交

錯した。

「……………気分はどう？」

「……………ああ、大分ましかな」

ムクリと起き上がると、額に乘せられていた濡れタオルが布団にずれ落ちた。

「学校には連絡しておいたから。心配なくていいわよ」

「……………悪いな。迷惑かけちまって」

「別に。慣れてるから、今更気にしないわ。それより、あなた、まだ起きて何も口にしてないでしょう？お粥作ったから、食べなさい」  
見るとベッド脇に小さな鍋が一つ。蓋を開けると湯気が立ち上った。まだ出来て間もないようだ。

「……………サンキュー」

「……………食べ終わったら、そのまま置いといて。何かあったら呼んでくれていいわ。私、下に居るから」

「……………お前、仕事は？」

「……………勘違いしないで。今日はたまたま休みだっただけよ」

志保がしていた電話の内容を新一は意識薄だった為、殆ど聞いていない。志保の照れ隠しにも、気付かないでいる。

志保は赤くなった顔を見られない様に部屋を出ていった。

## 第六話

志保の勤める研究所は基本的に休日は日曜、祝祭日のみで土曜日は午前中のみ仕事がある。いわば一昔前の小学校のようなスタイルをとっているのだ。

休みの日には研究所のメンバー内で、どこかに遊びに行こうなどと話している人も居るが、元来インドア派な志保がその話題に参加することは殆ど無かった。唯一あるとすれば、真田春香に誘われた時ぐらいなもので、志保自ら参加したがるなどといったことは、例え天と地がひっくり返ってもあり得ないだろう。

しかし、今日はまた何時もと違っていた。随分朝早くから起きて来ては、妙にそわそわして落ち着きがない。朝食を済ませると自室へ行き、暫く経ってよそ行きの服装になり戻って来た。日曜日に外出することなど、博士が覚えているかぎりでも、随分前のことだ。しかも、今日の志保は明らかに何時もと違う。友人と遊びに出掛けるといった軽い感じではなかった。

「志保君、今日はどこに行くんじゃ？」

「えっ!？」

思わず甲高い声を挙げた志保。先程から鏡の前で何度も何度も自分の姿をチェックしている。

「もしかして、新一とデートかのう?」

「なっ!!!ち、違うわよ!!!デートなんかじゃ」

顔を赤くして反論する姿からは何時もの冷静な志保の影は微塵も感じられない。

「……この間、彼が熱出した時に私が看病して、そのお礼に、買い物付き合ってくれるっていうから」

「そついうのを、デートというんじゃないよ」

笑顔で言う博士に志保はますます顔を赤くして俯く。するとその時、博士宅のチャイムが鳴った。

「ほれ、新一が来たぞい。しっかり楽しんでくるんじゃないよ」

博士に背中を押され志保は家を出ていった。

「……さて、二人の初デート。うまくいけばいいがの」

博士の呟きが小さく木霊した。

## 第七話

幸せを感じる時というのは人によって様々だろう。大好物をお腹一杯食べた時、忙しい人のたまの休日、好きな人と一緒に居る時。他にも色々ある。

今志保は、まさに幸せを感じていると言って良かった。生まれてこのかた好きな人と一緒に出掛けるなんてことを体験したことなどなかったし、更に二人きりというオプション付きだ。正直夕べはなかなか寝付けなかった。「デート」という言葉が頭を巡る度に顔が赤く染まる。

(……こんなに緊張するなんて。バカみたいだわ)

そう思いながら、隣を歩く新一の顔をチラチラと見る。端から見れば、自分達も恋人同士に見えているだろう。そんなことを考えて志保は一人で頬を染めた。

「何か欲しい物とかあるのか？」

今日は全て新一の奢り。しかし何でも好きなのを買ってもいいと言うわりには、新一はさっきから志保が見ているブランド物のバッグの値段をしきりに気にしている。

「……工藤君、そんな気にしなくても、私だって持ち合わせはあるんだから。大丈夫よ」

考えを見透かされたことを恥ずかしく思ったのか新一は少し顔を赤くして

「バ、バ一口。今日は俺が奢るって言っただろ」

強がってるのが見え見えだ。が、そんな新一も可愛く思える。志保は新一に気付かれないように小さく微笑んだ。

\*

「昼飯、どうする？」

ショッピングを終え、昼食時。志保は新一に任せると言い、結局近くのイタリアンの店に入った。

「……そういや、お前とこうやって出掛けるなんて初めてだよな」

注文を終え、料理を待つ間新一が口を開いた。

「まあ、前は小学生の体だったから。しょうがなかったかもしれないけど」

そこからは、何がきっかけになったのか新一お得意のホームズトークが始まり、止まらなくなっていた。しかし志保は文句一つ言わない。むしろ、そうやって話す新一の顔を穏やかな顔で見つめている。

この幸せな時間が

ずっと続けばいいのに。

その時、店のドアが開き見知った顔の女性二人が入って来た。

## 第八話

神様はいじわるだ。志保はこの時率直にそう思った。新一と二人で居るところへ、今一番会ってはいけない人を現せさせるなんて。せっかくの幸せな時間も、どうやら終わりらしい。

「あれ、新一」

あちらがこちらの存在に気付いたようだ。志保は思わず顔を下に俯けた。

「……蘭、園子も」

「何してるの？こんなところで」

蘭と園子は新一の陰に隠れているせいなのか志保の存在にはまだ気づいていない様子だ。が

「ああ、ちょっとこいつと出掛けててな」

ああ、もうこの人は。何を気安く紹介してるのか。志保の予感どおり、蘭の隣の園子が鋭く志保を見て歩み寄る。

「何でこの人と新一君が、二人で出掛けてるわけ？っていうか、この人誰なのよ」

「宮野志保。前にちよつと事件で知り合ってたな。色々協力してもらってたんだ」

蘭は「へえ」と言わんばかりの顔で志保を見る。きっと自分と歳もあまり変わらないであろう志保が、新一の事件捜査に色々協力してるといったことに感心と驚きを共々感じているのだろう。

「初めまして、毛利蘭です」

笑顔で挨拶をする蘭。

「……初めまして。工藤君から話は聞いてるわ」

「えっ？私のことですか？」

何を話していたんだ。悪口でも言っていたんじゃないかと言い合いを始める新一と蘭。そんな二人を見ていた志保の心は、強く締め付けられていた。

「……ごめんなさい。私、用事思い出したから帰るわ」

そう言っただけで席を立つ志保。新一は驚きを隠せない。

「おっ、おい。何だよ急に」

「宮野さん？」

もう限界だ。これ以上二人の仲睦まじい姿を見たくない。

「……これ、私の分。じゃあ」

後ろから新一の声が聞こえる。しかし志保はその声には振り返らず、

小走りに阿笠邸へと向かった。

\*

「おや、志保君。随分早かったの」

「……………ええ。ちょっと彼、用事が出来たみたいで」

そう言つと地下室へと入っていった志保。

扉が閉まる音が合図になったかのように、志保の眼からは涙が溢れ出した。

## 第九話

「……………はあ」

地下室のベッドに横たわりながら志保は深い溜め息をついていた。今頃は、自分のことなど忘れて楽しく三人、いや二人になっているかもしれないが。楽しく食事をしていることだろう。その光景を思い浮かべて、また目に涙が浮かんた。

「……………お腹空いたわね」

昼食の途中に抜け出してきたから、いい加減腹も減っている。まだ服も着替えていなかった。志保はベッドからゆっくりと起き上がると地下室の扉を開けた。

\*\*\*

「おお、新一じゃないか。どうしたんじゃ」

地下室からの上階への階段の真ん中あたりに来た時、上階の扉越しに博士の声が聞こえてきた。志保は思わず歩みを止めた。

「あのよ、灰原の奴帰ってるか？」

新一の声も聞こえた。瞬間、自分を追い掛けて来てくれたことをほんの少し嬉しく思う。

「ああ、志保君なら地下室におるよ。それより新一、用事が出来たんじゃないかったのか？」

「あ？そりゃこっちの台詞だよ。灰原の奴、用事を思い出したからって急に帰りやがってよ」

話が噛み合わないことに博士は困惑している様子だ。そうこうしているとな新一が上階の扉を開け、階段中腹に佇んでいる志保と鉢合せた。

「おつ、なんだそこに居たのか」

「……………何してるのよ。何でここに居る訳？」

「何でって…………。お前のこと心配したからに決まってるだろ。急に帰っちまいやがって。蘭の奴も心配してたぞ？」

「……………あ、そう」

そう言つとな新一の横をすり抜けて志保はキッチンへ向かった。

「おい灰原、お前なんか怒ってるのか？」

「……………別に」

「お前が前から、蘭のことが苦手なのは知ってたけど。あんな露骨に、来た途端に帰る真似なんてされたらあいつだって傷つくぜ？まあ、今回は俺が適当にフォローしといたけど」

きつとな新一に自分の気持ちは到底理解など出来ないだろうと志保は

思う。自分が蘭に対して妙に冷めた態度をとる理由一つにしても、ただ苦手だという風にしか認識していない。その奥底にある本音には全く気付いていないのだ。

「まあ、いいや。急病とかそんなんじゃないかって良かったから。んじや、今日は帰るよ。じゃあな」

笑顔を見せて阿笠邸を出た新一。

(……………何でもっと、突き放さないのよ。あんなことしたのに。お前なんかもう知るかっつて、何で怒んないのよ)

新一の優しさが、志保には辛い。そんな志保の気持ちかわかるのか博士は複雑な顔で新一を見送っていた。

## 第十話（前書き）

短めです。

## 第十話

志保の勤める研究所では昼の十二時から一時間を昼休憩と称している。当然のことながらその時に昼食を摂るわけだが、研究所内に食堂というものは無く、食事をするには弁当を持参するか外へ出て食べるかの二方法に限られていた。

志保はどちらかといえば自ら弁当を作りそれを持参するのが主流なのだが、この日志保は珍しく寝坊してしまい弁当を作る時間が無かった為、友人の真田春香と共に研究所傍にある洋食屋に赴いていた。

「志保、今日仕事終わったら、またあのケーキ屋さん行かない？」

春香には、以前ケーキ屋で新一と蘭を見掛けた際慌てて店を出てしまったことを随分と怒られた。理由も言わず、急に店を出たのだから当然といえば当然だ。

「今度は急に帰ったりしないよね。私、もっとゆっくりしたかったんだから」

「……ええ」

志保の素っ気ない返事は何も珍しいことではないことを春香は知っている。が、今の返事には素っ気なさよりも、何か落ち込んでいるような、そんな気持ちが春香には感じられた。

「……………どうしたの？志保」

「え？」

「……何か、元気ないからさ」

「……そ、そう？別に何でもないわよ」

「……本当に？」

「ええ。大丈夫だから、心配いらないわ」

そうやって笑う志保だったが、それが作り笑いであることは春香もわかってる。しかし春香は、小さく「そっか」とだけ呟いただけであった。

## 第十一話

何か隠してる。

特別確証があつた訳じゃないが春香は瞬間そう思った。志保と知り合つてかれこれ半年。ポーカーフェイスの志保の感情を完璧に読み取ることも多少なら出来るようになった。

今志保は、明らかに何か自分に隠している。しかし志保が「何でもなし」と言つ以上問い詰めて話させることは至難の業だろう。ならば、自らそれを突き止めるほか方法はない。春香だって、宮野志保の一友人として彼女の力になりたかつたのだ。

\*

志保の様子がおかしかつたのは、やはりあのケーキ屋に行つた時だ。あの時の何かが志保を悩ませているのだろう。

あの時、春香と志保は対面に座り話をしていた。店内で何か変わったことがあつた訳でもないし、勿論志保自身の身に直接何かがあつた訳でもない。

(……そういえばあの時、私の後ろの何かに反応してたような)

あの時、春香の後ろにはレジとケーキ陳列棚があつた。しかしそれが何なのか。

(も、もしかして、私の後ろに、見えちゃいけないものがいたんじゃない……)

思わずそんな考えが浮かぶほど、志保が反応したものがわからない。春香は懸命に当時の様子を思い出した。

（……あの時、確か陳列棚の前に高校生ぐらいのカップルがいたっけ）

あまりはつきりとは思いつけないが、確か男の方はなかなかの美形だったのをチラリとだけ見て覚えていた。

（……あの二人が、何か関係あるのかな。でも、どこの誰だかわからないし）

考えに耽り、つい前方不注意になっていた。

「きゃっ!!」

何かにぶつかってしまった。

「あつ、ごめんなさい。大丈夫ですか？」

低い男性の声。優しい雰囲気を感じられる。

「あつ、いえ。私こそ、よそ見してて。ごめんなさい」

春香はふと顔をあげた。

「…………あれ」

見覚えのある青い制服。確か帝丹高校の制服だ。

「……あなた、この間ケーキ屋に居た人」

思わず呟いて、相手は面食らっている。  
しかし、それ以上に春香は驚いていた。

今の今まで、頭の中に居た人物が今、目の前にいる。この偶然というかわからない状況に春香は、ただただ困惑していた。

## 第十二話

「……あなた、この間ケーキ屋に居た」

思わず口をついて出てしまった言葉に相手はかなり驚いている様子だ。しかしそれはこちらと同じこと。まさか、こうも簡単に目的の人物に会うことが出来ようとは春香自身一番驚いていた。

「……あなた、この間米花町に新しく出来たケーキ屋さんに来てましたよね？」

相手は今、過去の出来事を遡っている。そして数秒と経たない内に思い出した様子で「ああ」と呟いた。

「……じゃあ、あの時あなたもあの店に？」

しかし、なぜそんなことを一々この女が言ってくるのかがわからない。男性と春香は同じ店に居たとしても、会話は交わしていないし少なくとも男性側からは春香の存在は印象に残っていなかったからだ。

「……あの、失礼ですけどお名前は？」

男性は自分がど忘れてもしているのかという思いを抱きながら春香に聞いた。

「あつ、ごめんなさい。急に色々言っただけ分かんないですね。なんか驚いちゃって。私、真田春香と言います。宮野志保って、知っ

てます」

男性の顔に反応が見えた。

「えっ、ええ。宮野志保は、知り合いですけど」

「私、志保の働いている研究所での同僚なんです」

「……ああ。そうだったんですか」

男性はそれからしばらくして「僕は、工藤新一と言います」と名乗った。どこかで聞き覚えのある名前であった。

\*\*\*

「じゃあ、あの時あいつも店にいたんですね」

「ええ。あなた達が店に来た入れ違いで、私達が出て行ったから」

聞けば新一は春香よりも一つ年下。高校二年生だという。

（……………志保とこの人が知り合いで、あの場面で逃げるように立ち去った理由として考えられるのは、志保がこの人のことをめっちゃ嫌っているか、あるいは、この人に恋をしているか。どちらかの可能性が高いわね）

「志保とは、付き合い長いんですか？」

春香が聞いた。

「いや、まだ知り合って一年経ってないですよ。あいつ俺の家の隣に住んでる人の家に越してきたんです。あいつの両親、あいつが子供の頃に亡くなって、唯一の身内だった姉さんも一年ぐらい前に亡くなって。それで俺の家の隣に住んでる親戚の爺さんの家で、今は暮らしてるんです」

春香に組織のことなどを言うわけにはいかないので新一は適当にこまかした。とつさに考えたにしてはなかなかのものだと思う。

「……そうだったんですか」

春香は春香で、自分が知らなかった志保の一面を新一が知っていたことに少し悲しさを覚えていた。

「真田さん、宮野とは友達なんですよね？」

「えっ、ええ」

「あいつ、色々と付き合いにくい部分もあるだろうけれど仲良くしてやって下さいね」

「……はあ」

「正直、人付き合いが苦手だし、感情を素直に出そうとしねえし、言葉に棘はあるし、何でも一人で抱え込むし、周りから見れば壁を作ってるように見られるのも仕方ないけど、あいつ本当はすごい奴ですから。だから、ずっと友達で居てやって下さい。あいつも真田さんのこと信頼してるだろうから」

「……………信頼、してくれてるかしら」

「ええ。それを表に出そうとしていないだけです。僕にはわかりません」

「……………何でわかるんです？」

「……………似てるんですよ。雰囲気っていうか、なんというか。あいつに初めて出来たかけがえのない友人に」

新一はその時、かつて自分と志保がコナンと哀だった頃のあの仲間達を思い出していた。

『コナン君、哀ちゃん』』

カチューシャを着けた愛らしい少女。哀に初めて出来た親友。最近会えていないが、元気にしているだろうか。

「まあ、そんな訳なんで、頼みます。じゃあ、俺こっちなんで」

そう言って立ち去る新一。春香はその後ろ姿をしばらく見つめていた。

### 第十三話

「昨日ね、工藤新一君に会ったの」

志保と春香が二人で昼食を食べていた時、唐突に春香は切り出した。志保は口内のご飯を嚙むことすら忘れる程驚いている。

「……………え、会ったって。どうして」

「たまたま町で会ったの。あの時ケーキ屋さんに居た人が、志保の知り合いだったなんて驚いたよ」

気付いていたのか。志保は顔を俯ける。

「色々聞いたよ、志保のこと。あの人、私が知らないこともいっぱい知ってたし、それよりも志保をよく理解してるなって思った。知り合って一年経ってないのに、凄くなって」

「……………」

「二人の間には、きつとどんなものでも断ち切れない絆があるんだろうなって、そう思えたよ」

しばしの沈黙の後、再び春香が口を開く。

「……………好きなんでしょう？あの人のこと」

俯いたままの志保の表情に微かに反応がみられた。

「だからあの時、逃げたんでしょ？彼と一緒に女の人が居たから、それを見たくなくて」

「……………」

「志保の気持ちもわからないわけじゃないけど、やっぱり逃げてちや駄目だよ。逃げてばかりじゃ、勝てないじゃない」

志保の脳裏に蘇る過去の記憶。

『逃げてばっかじゃ勝てないもん！！ぜっーたい！！』

そうだ。いつかあの少女が自分に教えてくれたではないか。“逃げない”ということ。

(……………逃げてばかりじゃ、駄目)

そうだ。結果を怖れるから駄目なんだ。

大切なのは、相手に自分の素直な気持ちを伝えること。結果を怖れてはいけない。

志保は顔を上げ微かな笑みを浮かべながら

「ありがとう」

と告げた。

## 第十四話

「……ふう」

溜め息とも深呼吸ともつかぬ大きな吐息。ここに来て、もう何度目だろう。昼間は子供達で溢れている日曜日の米花公園も、夜になると異様な程静かになる。

志保はポケットから携帯を取り出して時間を確認する。21時10分。指定した時間より10分過ぎていた。

「……遅刻してんじゃないわよ」

ちょうどその時、息を切らしながらこちらに来る人の気配を感じ、志保は顔を上げた。

「わ、悪い。待たせちゃったな」

「……工藤君」

よほど慌てて来たのだろう。しかしとりあえず来てくれて良かった。今日来てくれなければ、この決意はまた揺らいでしまうに違いない。

「で、話ってなんだ？」

志保の隣に腰を下ろす新一。志保は意を決したようにまた大きな吐息をついた。

\*\*\*

「……とりあえず最初に、前、急に帰ったりしたことを謝っておくわ。せつかく誘ってくれたのに、ごめんなさいね」

「なんだ、んな事か。そんなの今更氣にしてねえさ。お前にもなんか事情があつたんだろうしな。心配はしたけど、怒っちゃいねえよ」

「……そう。ありがとう」

「話つて、それか？」

「………本題はこれからよ。その前に何である時、私が急に帰ったりしたかわかる？」

志保の質問に新一は頭を悩ませている様子だ。事件捜査に使う頭は優秀なくせに女の子の気持ちに関しては本当に鈍感な新一。

（矛盾してるわ）

本当にそう思う。

「蘭が関係してんのか？」

「………ええ」

「じゃあ、お前が蘭のこと苦手だからじゃねえのか？お前ずっと前から、蘭とは距離置いてただろ？」

「………別に蘭さんのことが嫌いとかそんなんじゃないわよ。ただ

見たくなかったの」

「見たくなかった？何を」

その瞬間志保は新一を見つめる。

「……………あなたと蘭さんが、一緒にいるところ」

「……………え？」

「あなたと蘭さんが二人でいたり、仲良く話してたりすると胸が締め付けられて、嫌な気分になったわ。悲しくて悔しくて、どうしようもなかった。どうしてそんな気持ちになるかわかる？」

「……………」

「……………それは、私があなたを好きだから。それ以外に答えはないわ」

言った。新一は驚いた表情を見せている。志保は決して新一から視線を逸らそうとはしなかった。

## 第十五話（前書き）

この話で、第一部は終わりです。次話からは第二部に入ります。感想お待ちします

## 第十五話

互に見つめ合って視線を逸らさないこの状態になって、一体どのくらいの時間が経っただろう。

自身の想いを新一に告げた志保。新一は驚きを隠せない様子だ。

「……………なんか、言いなさいよ」

先に視線を逸らしたのは志保の方。頬を染めながら新一に言う。一方の新一も、予期していなかった志保からの告白にただただ驚き、そして困惑している様だった。

「……………あ、えっと。悪い、ちょっとびっくりしちゃって」

「……………」

気まずい空気が流れる。新一も志保もどうしていいかわからないのだ。

「……………あの、さ。灰原」

しばらくの沈黙の後、新一が切り出した。

「……………なに？」

「……………お前の気持ちは嬉しいよ。ありがとう。でも、実は俺自身、自分の気持ちがわかんなくなってるてよ。正直言うと、蘭のことも、お前のことも気になってるっていうか。だから、今すぐ返事は出来

ねえんだ。だから灰原、少し時間をくれねえかな？。ちゃんと決めるから」

「……………わかった。でも工藤君、私に気を遣ったりするのはやめてね。どんな結果でも、私は受け入れるから」

「……………ああ。わかった」

\*\*\*

「で？とりあえずは保留って訳？」

「……………まあ、そういうことね」

翌日、志保は告白の後押しをしてくれた春香に昨夜のことを話した。とりあえず新一がちゃんと自分の気持ちを考えて、本当に好きなのは誰なのかをはっきりさせるまでは返事は保留ということである。

「まあ、これで志保にも恋人になれる可能性が出てきた訳だ。そういう意味では良かったね」

「……………別に。むしろさっさと振ってくれた方が、モヤモヤしなくて済んだわ」

「また、そんな強がり言って。本当は、彼が自分のこと少しでも意識してくれて嬉しくせに、それに振られたらきつと、泣いちやってたでしょ？」

「……………」

凶星だ。反論のしようがない。

「まあでも、とりあえず自分の気持ち素直に言えたんだから。それだけは自分を褒めてあげなきゃね」

「……………そうね」

そう言って志保は小さく笑みを浮かべた。

第一部・完

## 第十六話（前書き）

第二部開始。新一君側です

## 第十六話

あの日から頭を埋め尽くしているのは推理関係でもサッカー関係でもなく、幼なじみと相棒のこと。こんなにも自分の気持ちと真剣に向き合ったのは生まれて初めてかもしれない。

自らの初恋の相手でもある幼なじみとは以前と変わらぬ関係が続いている。蘭の気持ちはコナンの時に痛いほどわかつているし、本来なら元に戻ってすぐに告白、という流れになるはずが、今の自分の心にはもう一人の女性が居る。かつて敵組織に居て、今や自分の相棒でコナンの時から素の自分を出せた数少ない仲間、唯一の運命共同体である志保。

今、新一の心には蘭と志保の二人が居座っている。そしてその二人共が、新一に恋心を寄せているのだ。ならば、自分は一体どちらが好きなのか。蘭か志保か。それがわからない。

(……………俺、どっちが好きなのかな)

我ながら優柔不断な男だと新一は自分自身に呆れる気持ちがあった。

\*\*\*

学校からの帰り道、この日新一は一人で下校していた。蘭は園子と寄り道をしている。

新一がちょうど米花商店街を通った時、買い物袋を提げた志保の姿を見つけた。向こうも新一に気づいたらしい。歩みを止め新一が来るのを待っている。

「おかえりなさい。一人？」

「ああ、蘭は園子とどっか行っただよ」

そう。と言いながら少しばかり嬉しそうな志保。

そのまま二人並んで歩いていく。まあ家が隣なのだから当然だろうか。新一は志保から荷物を受け取り通学カバンと共に手から提げる。

「今日はカレーか？」

「ええ。シーフードカレーだけどね」

新一は夕飯は阿笠宅で食べている。そのことは蘭も知らない。別に隠しているつもりはないのだが、改まって言うようなことでもないだろうと言っていなかった。

「……………」

「……………何？ジロジロ人の顔見て」

何時の間にか志保に視線をやっていた。志保は頬を少し赤くしながら言う。

「い、いや。別に……………」

新一の頬も、赤くなっていた。

## 第十七話

帝丹高校は間もなく冬休みに突入しようとしている。新一が元の体に戻ってから既に三ヶ月が経過し、志保の告白からも一ヶ月を数えようとしていたが新一は未だに答えを出せないでいた。

蘭と志保、自分はどちらが好きなのか。以前の新一なら迷わず即答出来た問いであるはずなのだが、今は状況が違う。新一のたった一人の運命共同体である志保の存在があるのだ。コナンの時から、数少ない自らをさらけ出せる相手として、共に闘った同志として、自分が信頼した相棒として、少なからず新一は志保に対して好意を持っている。それは新一も自覚はしていた。しかしだからといって、蘭より志保が好きなのかと聞かれれば首を縦には振れないし、逆に志保より蘭が好きなのかと聞かれてもこれまた同じこと。

二人の女性に好意を寄せられ、その二人に自分も好意を持っている。

(……決められねえよ)

屋上に居た新一の耳に始業開始のチャイムが聞こえたが、新一は教室に戻ろうとはしなかった。

\*\*\*

帰り道、新一は蘭と二人で歩いていた。蘭は先程から何やら話をしているが新一の耳には入っていない様子だ。

「ねえ新一、聞いているの？」

「え？」

どう考えてもこの態度は聞いていなかった証左だ。蘭は頬を膨らませた。

「だから、来週の園子の家のパーティー、新一も行くんでしょ？」

「……来週のパーティー」

そう言えば鈴木財閥生誕何十周年かの記念パーティーがあるからと新一のところにも招待券が来ていたことを思い出す。確か、大して目も通さぬままになっている筈だ。

「……あつ、ああ。忘れてたよ」

「もうっ。しっかりしなさいよね。来週の日曜日、夜七時から米花シティホテルだから、遅れないようにしなさいよ」

「……ああ、わかった」

正直パーティーどころの気分じゃないのだが、行かなければきつと蘭からもあの喧しいお嬢様からも文句を言われるハメになるのは目に見えている。

（……気分転換と思うか）

新一は自分自身にそう言い聞かせるようにして自宅へと歩いていった。

\*\*\*

阿笠宅での夕飯を終え、ソファでくつろいでいた新一の隣に洗い物を終えたらしい志保が座った。因みに博士は地下室。二人に気を遣ったのであろう。

「……ねえ、工藤君」

「ん？」

「来週の日曜日、あなた空いてる？」

「……来週の、日曜」

「研究所の友達から、映画のチケット譲ってもらったの。なんか元々彼氏と行く予定だったらしいんだけど、相手の人に都合が出来たみたいで。それで私に譲ってもらったんだけど、良かったら……。その……。一緒に……。行か、ない？」

来週の日曜日。園子のパーティーの日と重なっている。しかも映画の時間は夜七時からというタイムリーさ。

「……………」、「ごめん。俺その日は用事があったさ」

「……………」、「用事？」

「ああ、鈴木財閥の記念パーティーに呼ばれてるんだ。別に行きたって訳でもねえんだけど、行かねえと後がうるさいからさ。だか

ら、ごめんな」

「……………そう、なら仕方ないわね」

そう言っで差し出していたチケットをポケットに戻しソファから立ち上がる志保。

(……………灰原)

志保の後ろ姿が妙に寂しく思えて新一はずっと志保の後ろ姿を見送っていた。

## 第十八話（前書き）

久しぶりの投稿になりました。感想お待ちしております

## 第十八話

「うわゝ、凄い人だね」

「……ほんとだな」

何時もより少々着飾った衣装の新一と蘭。今日は鈴木財閥生誕百周年の記念パーティーが開かれていて、令嬢園子の友人でもある二人は当然のごとく招待を受けていた。会場には人がごった返しており、改めて鈴木財閥の凄さというものを思い知らされる。

「蘭、新一君」

二人に声をかけたのは、これまた何時もの数倍着飾った衣装の鈴木園子。傍らには彼女の母親の姿も見える。

「夫婦そろって、お似合いよ」

「もうっ！園子！！」

蘭と園子がそんなやり取りをしている時、新一は志保のことを考えていた。彼女は今頃、別の友人と映画を楽しんでいるだろうか。誘いを断った時の、あの寂しそうな、悲しそうな顔が新一の脳裏に焼き付いて離れない。

「ねえ蘭、新一君元気ないけど。何かあったの？」

「……さあ。ただ、最近何かに悩んでるみたいなの。だけど、聞い

ても何でもないの一点張りで」

正直蘭から見れば、新一の様子は心ここにあらずで、何か別なことに思いを馳せているといった風情だ。しかしそれは今日に限ったことじゃない。

一ヶ月程前から、新一が何かに思い悩んでいるのは明らかで、自分が話しかけたりしてもそっけなかったりする。

(……何考えてるの？教えてよ新一)

\*\*\*

「志保、ポップコーン買ってきたよ」

そう言って二つ持つポップコーンの一つを志保に手渡す。隣に座った春香は早速それを一口頬張った。

「この映画、見たかったんだ。ありがとうね誘ってくれて」

「……そう。良かったわ」

喜んでくれるのは嬉しいが、隣の席が新一ならもっと嬉しかった。新一は今頃蘭と二人で鈴木財閥のパーティーに行っているだろう。

(………工藤君)

新一と蘭が二人で居るところを想像して、思わず不快な気分になったが、何とかそれを押さえ込みポップコーンを一口頬張った。



## 第十九話

「…………ふう」

パーティーが行われている会場をこっそりと抜け出し、新一はホテル外へ出ていた。上空は満天の星に埋め尽くされていて、ほんの一瞬间安らいだ気分になる。

正直、パーティーを楽しむ気分にはなれそうになかった。蘭や園子と話していても、頭の片隅に志保のことが思い浮かんでそちらに意識がいくからだ。彼女からの誘いを断った時の、あの悲しそうな顔が何度もフラッシュバックしてくる。

（…………俺、あいつが好きなのかな）

こんなにも志保のことが気になるのは、自分が彼女に恋をしている証拠なのではないか。新一の中にそんな思いが芽生え始める。正直、最近は志保のことが頭から離れない。

（……………会いてえな）

新一は空を見上げ、志保を思った。

\*\*\*

「あつ、もう。こんなとこに居た」

そう言つて新一の背後から現れたのは蘭である。どうやら会場に新一が居ないことに気がついて探し回っていたらしい。

「何してるの新一。こんなところで」

「……………何でもないよ。ちょっと風に当たりにきたただけだ」

そう言つた新一を、寂しそうな表情で見つめる蘭。

ここ数日の新一の様子はどう考えてもおかしい。蘭はそう思つていた。話しかけても上の空で、何かに悩んでいる風にも見えるが、何でもないの一点張り。蘭は自分と新一の距離がだんだん開いていくのを内心感じていた。

「……………ねえ新一」

「ん？」

「……………新一は、私のこと嫌い？」

突然の蘭の問いに新一は動揺する。

「……………な、何だよ急に」

「……………だって、最近の新一、何か素っ気ないし、私嫌われたのかなつて思つて」

「バ―口。変なこと言つてんじゃないよ。俺がお前を嫌つたりする訳ねえだろ？もう何年の付き合いだと思つてんだよ」

「…………へへっ。そっか。なら良かった」

笑顔を見せる蘭。もし自分が志保を選べば、この笑顔も悲しい表情に変わってしまうのだろうか。

「ほら、そろそろ戻る？」

蘭に促され新一はホテル内へ戻っていった。

## 第二十話（前書き）

短めです

## 第二十話

パーティーも終わり新一と蘭は帰路についていた。時刻は午後十一時近くなっており、女性の蘭を一人で帰らせる訳にもいかない新一は蘭と共に毛利探偵事務所への道を歩いていた。

「美味しかったね、料理」

「……ああ、そうだな」

「タレントさんとかも居たし、やっぱり鈴木財閥ってすごいんだね。園子が羨ましいよ」

「……ああ、そうだな」

蘭が新一を悲しそうな眼で見つめる。

「……やっぱり、新一おかしいよ」

「………え？」

「絶対おかしい。何言っても返事が素っ気ないし、明らかに何かに悩んでる」

「そんなことねえよ。別に普通さ」

「普通じゃないよ、私だって、新一の幼なじみずっとやってるんだよ？わからない訳ないじゃない」

「……………」

新一は黙りこくる。

「ねえ新一、何悩んでるの？私に言えないようなこと？私って、そんなに頼りない？」

「違う。そうじゃない……。そうじゃないけど」

言える訳もない。まさか蘭も、自分のことで悩んでいるとは夢にも思っていないだろう。

「……………ねえ新一。新一は私のこと、どう思ってるの？」

「……………えっ」

「……………異性として、どう思ってる？」

突然の蘭の問いに、新一は言葉がなにも出てこなかった。

## 第二十一話

互に見つめ合ったまま一体どのくらいの時間が経っただろうか。先に目を逸らしたのは蘭の方だった。この空気に堪えきれずといった様子だ。苦笑いしながら「ごめんね」と言った。

「急にこんなこと言われて、答えられる訳ないよね。ごめん」

そう言っで、また何事も無かったかのように歩き出す蘭。新一はその後を追うように歩いている。

今の蘭の問い。以前の自分なら即答出来た筈だ。だけど、今は何も言えなかった。

（……蘭のことは、嫌いじゃない。勿論大好きだ。だけど今回、気付いたことがある）

今回、蘭とパーティーに参加し、新一は自分の気持ちを確信しつつあった。

（……蘭のことは大好きだ。だけど、それはきっと恋愛対象としてじゃない。今の俺は、灰原が、好きなんだ）

パーティーの最中も、志保のことが頭から離れなかった。考えてみれば以前からそうだった。自分の心の中には常に志保が居たのだ。

（俺は、灰原が好きなんだ）

蘭を悲しませてしまいかもしれない。だけど、自分の気持ちかわかってしまった以上、嘘はつけない。

何時かは、蘭に告げなければいけない日が来るのだ。

だったら早い方がよい。

「蘭」

新一は先を歩く蘭を呼び止めた。

「どうしたの、新一」

「……さっきの質問、答えるよ」

「……」

蘭が新一に向き直る。

「……俺、蘭のことが好きだよ。だけど、それは恋愛対象としてじゃない。一種の家族愛みたいなものだ、俺は思ってる。だから……」

「やめてー!!」

蘭の口をついて出た激しい言葉。新一は話すのを止めた。

「……もう、聞きたくない」

「……蘭、ちゃんと聞いてくれ」

「嫌……嫌だよ。そんな話、もう聞きたくない!!」

そう言うやいなや蘭は新一の制止の声も聞かず走り出してしまった。

(……………蘭)

新一は、しばらくそこに立ち尽くしていた。

## 第二十二話

春香との映画鑑賞を終え、夕食を食べてから帰宅した頃には既に十一時を廻っていた。帰ると博士はまだ起きていて志保の帰りを待っていた様子だ。

博士が夕飯に使用したらしい食器類などは博士自身によって片されており、風呂の支度も出来ていると聞いた志保は博士の勧めに应じて風呂に入ることにした。

ブーツブーツ

着替えを持ち、風呂場へ向かおうとした時携帯電話が鳴った。数秒で鳴り止んだ為恐らくメールであろう。志保は、着替えを一旦置き携帯電話を開いた。

「……………工藤君」

メールの送り主は工藤新一であった。今日は蘭と二人でパーティーに行ったのではなかったのか。何故、自分にメールなど送ってきたのだろう。志保はそんな思いに駆られながらメールボックスを開いた。

『夜遅くにごめん。今、出て来られるか?』

メールを読んだ瞬間志保は携帯を閉じ外へ飛び出した。最早、お風呂に入ろうとしていたことなど頭から離れていた。

阿笠邸を出ると、隣の工藤邸の門前に立つ新一を見つけた。こちらに気付いた新一は、何故かほっとした様な顔をしている。

「よう。悪いな、こんな時間に呼び出して」

「……別に、大丈夫よ。私もさつき帰ってきたばかりだから。……で、なに？」

「……うん。ちょっと、話がしたくてさ」

「……話？」

「……ああ。俺、やっと自分の気持ちがあったんだ。それを、言いにきた」

新一の真剣な眼差しを見て志保は思わず目を逸らした。一瞬、ドキリとしてしまった自分が恥ずかしい。

「……俺、やっとわかった。自分が誰を好きなのか」

新一の目が志保を見つめてそれを逸らそうとしない。志保は頬を染める。鼓動は高まるばかりだ。

「……灰原。俺は、お前が好きなんだ」

その言葉は、自分が何よりも望んでいたもの。自分が何よりも欲しかった言葉。その言葉を、聞くことが出来た。

「……ほんと、なの？」

信じられない。その思いの方が強い。

「……俺がこんな冗談言う奴に見えるか？」

いや、全くもって思えない。新一はそんなことを冗談なんかでは決して言わない。

ということは。

「……………」

気がつけば志保は新一に抱きついていていた。新一も志保の背中に手を廻す。

だけど、これで全てが解決した訳じゃない。蘭の問題もある。

しかし今は、この幸せな時間をしっかりと感じていたいと新一は思っていた。

## 第二十三話

きつく抱きしめ合い名残惜しそうに離れると急に照れくさくなって二人は同時に頬を染めた。互いにどうしていいのかわからず、なかなか目を合わせる事も出来ない。たった今想いを通わせ合った事が夢のようにも思えるのだ。

暫くの沈黙を経て、ようやく新一が口を開いた。

「……家、来るか？珈琲でも出さず」

いきなり自宅に来るかと言われ新一の下心を疑った志保だが、一瞬の内にその疑惑も頭から消えた。考えてみれば新一も緊張しているのだ。そんなことを考えている余裕も恐らく無いだろう。そう思った志保は新一の誘いに応じ、工藤邸へと入っていった。

\*

部屋に招き入れられソファへ座らされると新一は珈琲の支度に取り掛かりだした。志保自身工藤邸に来るのは初めてではない。組織に居た頃に二回、灰原哀の時に一回訪れてはいるが、今日のようにリビングでゆったりするのは初めてのことに。改めて見ると高校生が一人暮らしするには広すぎる家である。更に新一の妻になる女性はこの広い家を掃除しなければいけないのだ。

(…私に出来るかしら)

ふとそんな事を考えている自分に気がつき志保は一人で頬を染めた。

「ほい、珈琲」

「……………ありがとう」

一口啜る。なかなか美味い。新一は志保の隣に腰を下ろした。

「……………なんか、まだ実感わかねんだよな。俺達が、恋人同士なんて」

それは志保だって同じこと。つい数時間前までは新一と二人でパーティーに行っている蘭に嫉妬心を覚えていたのだ。それがここへきてのこの急展開。頭がついていかないのも道理と言える。

「……………ねえ、工藤君。お願いがあるの」

「ん？何だ」

だから、ちゃんと頭に理解させる為に志保はもう一度言葉が欲しかった。

「さっきの言葉、もう一度言ってくれる？私に言ってくれた、あの言葉」

こんなこと思うなんて自分にも随分女の子らしいところがあるなと我ながら思う。

「……………あの言葉って」

「…………俺は、お前がつてやつ」

そう言つて新一を見つめる志保の頬はほんのり赤い。普段ならこんなこと恥ずかしくて言えないが、今日ぐらいはと志保は自分に言い聞かせた。

志保の言葉を聞いた新一はゴクリと唾を飲み、志保の肩を両手で掴み真つ直ぐに志保を見つめ、言った。

「…………灰原、俺は、お前が好きだ」

志保はその言葉を噛み締めるように目を瞑る。

「…………お前は、言つてくんねえの？」

「…………言わなきゃ、駄目？」

「俺に二回も言わせたんだから、お前だって一回ぐらい言つてくれよ」

志保は恥ずかしそうに俯き気味になり意を決したように口に出す。

「…………私も、好き」

凄く小さな声だったが志保の気持ちは新一にしっかりと届いた。そして新一は志保を抱き寄せる。

「…………志保」

初めて志保と呼ばれた。志保は新一の腕の中で顔を上げる。

「……………工藤くん」

志保が目を閉じたのを確認してから、新一はゆっくりと志保に顔を近づけていった。

## 第二十四話

窓から差し込む陽の光に眩しさを覚えて新一は閉じていた目をゆつくりと開いていった。視界に飛び込んでくるのは見慣れた部屋の天井。何時もと何ら変わらない朝だ。唯一違うと言えば、自身が何も身に纏わずベッドに入っていること。その事に気がついて新一の頭に昨夜のことが蘇ってきた。

(……夢、じゃねえんだよな)

当初からそういうつもりだった訳では無論ない。仮にそんな気持ちがあつたとしてもほんの僅かなものだった筈だ。だが、昨夜志保と口付けを交わした後新一は無性に彼女が欲しくなった。自分自身を抑えきれなくなっていたのだ。

気がつけば新一は再度志保に口付けし、彼女の服に手をかけていた。ここで重要なのは志保の対応だが、彼女は、最初驚きで僅かに抵抗はしたもののすぐに新一に身を委ね始めた。

「愛してる」

行為の最中、志保から幾度となく発せられた愛の言葉。普段とは違った彼女が垣間見えた気がした。

\*

「おはよう」

服を着て部屋を出るとキッチンで何やら作っている志保が居た。どうやら朝食の支度を進めてくれているらしい。

「悪いな、朝飯作ってもらって」

「……簡単なスクランブルエッグよ。冷蔵庫に食材殆ど無かったから、これしか出来なかったわ」

それはそうだ。新一は普段料理などしない。夕食は基本志保の作ったものを食べていたし、朝食は抜くことが多かった。

「駄目よ？朝ご飯はちゃんと食べないと。ましてや、あなたまだ高校生なんだから」

「……………ハイ」

昨夜の志保は何処へ行ったことや。一夜あければ元通りになっている。まあ、この方が彼女らしいかな。と新一は一人で納得していた。

## 第二十五話（前書き）

変更点があります。以前、「第二十三話」を第二部完結編としていましたが、今回の「第二十五話」を第二部完結編とすることになりました。よって次回から第三部とさせていただきます。突然の変更、申し訳ありません。

## 第二十五話

「……ねえ。本当にこれで良かったのかしら」

朝食を食べながら志保はふと呟くように言った。新一は志保に顔を向け「何が？」と問う。

「……蘭さんのことよ」

そうだ。新一は蘭ではなく志保を選んだ。まだ蘭はこのことを知らないが、バレルのは時間の問題だろうし、だいいち自分達の関係を黙ったまま接することなど出来ない。

「……蘭のことなら大丈夫。俺がちゃんと話すから。だから、心配しなくていいよ」

「……………」

蘭は自分達のことを認めてくれるだろうか。

志保にとって蘭が不幸になることだけは避けなければならない。蘭には幸せになってほしいのだ。

その為には、例えば自分が辛くとも、今の幸せを手放す覚悟を志保は持っていた。

\*

「……新一」

「……おお。悪いな、急に呼び出したりして」

帝丹高校屋上。新一は蘭を呼び出していた。

「……話って、なに？」

「……。蘭、あんな、実は俺、恋人が出来たんだ。お前も前にちよっと会った宮野志保って奴なんだけだよ。……。このことを報告したかったんだ。蘭には待っててくれとか、思わせぶりなこと言つて、その結果がこんなことになっちまって本当に悪いと思ってる。だけど、俺はやっぱりあいつが好きなんだ。この世界中の、誰よりも。……。だから、蘭」

「もう、いいよ」

新一の言葉を遮る蘭の声は思いのほか穏やかだった。

風が強く吹き抜ける。

「新一の気持ち私が私に向いてないってことは最近気付いてたし、今日呼び出されたのも、多分そのことが理由だろうなって思ってたから」

「……蘭」

空を見上げる蘭。

「人の気持ちなんて変わっちゃうものだし、ずっと新一に好きでいてもらえなかった私にも責任はあるから。だから、別に新一や宮野さんのこと恨んだりしないよ。まあ、この間はちょっと動転してあんな感じで逃げちゃったけどさ」

わかる。無理して明るく喋っているのが。溢れそうになる涙を必死で堪えているのが。

「もっと泣きわめいたりすると思ってたんじゃない？」

正直、少し思っていた。もしそうだったら蘭との関係に亀裂が入ってしまうかもしれないと考えていたのだ。

「大丈夫。新一の前じゃ泣かないよ。後で園子の家で泣くから。それに、きれいさっぱり諦めて、また今まで通りの関係で居るのが一番かなって思うの。だから、明日になったら、元通りになってるから。心配しないでね」

「……………蘭」

チャイムが鳴り響く。休み時間も終わりだ。

「あつ、やば。そろそろ戻らないと」

「……………ああ」

先に歩き出す蘭。新一はその後ろ姿に声をかける。

「ありがとな」

立ち止まった蘭は笑顔で振り返り

「今度、ちゃんと宮野さん紹介してよ？」

「……………ああ」

空は綺麗な青空だった。

第二部・完

## 第二十六話（前書き）

第三部開始です。感想お待ちします

## 第二十六話

「ちょっと工藤君、早く起きなさい」

ぼんやりした意識の底から聞こえる女性の声。初めの内は途切れ途切れだったその声が今初めてはつきり聞き取れた。重たい瞼を懸命に開けると視界に飛び込んで来たのは、怒っているのか呆れているのかどつちつかずの恋人の顔。夕べ見た新しい寝間着ではなく既に外出服に着替えているところや彼女の苛ついた様子から考えると、彼女の出掛けの時間が迫っているのだろう。その証拠に新一が起き上がると「早く朝食済ませて」と言い残しさつさと部屋から出て行ってしまった。

宮野志保と恋人同士になったのは三年前。組織との闘いを経て二人は相思相愛の仲になった。志保に告白され、自らの気持ちを模索した結果幼なじみの毛利蘭より、相棒の宮野志保が好きだと気付き、蘭にも理解を得て今現在に至るのだ。

「今日は何時よりも早いんだな」

朝食を食べながら洗い物を進めている志保は新一に見向きもせず「今ちょっと研究を進めてるプロジェクトがあつて、早めに行かないといけないの。だから、ちんたら食べないでくれる？ 洗い物片付かないんだから」

恋人になる以前から彼女の性格はよく知り尽くしているし別に今更驚きもしないが、今でもたまに志保が自分の事を本当に好きなのか

と疑いたくなるときもあるのも事実だった。三年前に告白したのは志保だが、人の気持ちなど月日が経てば変わってしまうことは新自身がよくわかつている。もしかしてこの三年間の間に志保の気持ちは自分から離れてしまったのではないだろうか。

しかし思わずそんな勘ぐりをしたくなる自分が新一は嫌でもあった。

(……倦怠期とかじゃねえよな)

考えを中断させるように最後の一口になった食パンを口に放り込み、新一は椅子から立ち上がった。

## 第二十七話

「あゝ、疲れた」

研究所を一步出たところで肩をグルグル回しながら愚痴を零すのは真田春香である。隣を歩く志保も口には出さないが疲労困憊の状態で、早く帰宅してベッドに横になりたい気分だった。

真田春香は三年前に志保が研究所で働き始めてからの友人で歳も同じ。志保とは対照的な性格の彼女は、最近新しい彼氏が出来たらしく、この間から少々浮かれ気味で明日の休みにはデートに行くんだと話していたのをふと思い出す。

(……デート、か)

思えば自分達はどうだろう。最近自らの仕事が忙しく帰りも夜中になることだって少なくなかったし、たまの休みでも私立探偵として活動する新一となかなか時間が合わないことが多い。付き合い始めて三年、デートらしいデートも他のカップルに較べれば驚く程少ないに決まっている。一番最近でも一ヶ月以上前のことだ。

(……これじゃ、本当に恋人なのか疑わしいわね)

志保は小さく溜め息を吐いた。

志保は今、新一と一緒に工藤邸に住んでいる。付き合い始めた当初は博士の許しが出なかったので別々だったのだが、新一が高校を卒業し、私立探偵としての活動を始めてからは一緒に住むことを許可され現在に至る。志保が帰宅した時、玄関には新一の靴があった。どうやら新一は既に帰って来ているらしい。

「ただいま」とリビングへ入ったが新一の姿はなかった。自室に居るのかと部屋を覗いたがここにも居ない。あとは風呂がトイレかすると再びリビングに戻ったところでトイレから出てきた新一と鉢合わせした。

「おう、おかえり」

「ただいま。」

既に家着に着替えているところを見ると随分前に帰宅していたらしいことがわかる。時刻は午後十時半。それでも昨日に較べれば一時間近く早い帰宅だ。そのことは新一も思っただらしく

「今日は早いな。研究は？」

「とりあえず一段落したわ。明日は久しぶりの休み」

「そっか。お疲れさん」

「あなたは？」

「ん？」

「明日、仕事なの？」

一応明日は日曜日。どこかへ出掛けるには絶好の日だろう。

「えっ？ああ、一応休みだけど」

「じゃあ、どこか出掛けましょ？最近そういうのなかったし」

「……まあ俺はいいけど、お前疲れてんじゃねえのか？久しぶりの休みなんだし、家でゆっくりしてたほうが」

新一がそう言うや否や志保は新一にそっと抱きついた。突然のことに新一は驚く。

「志保？」

新一の胸に頬をくっつけて腕を背中に廻しながら目を閉じる。こんな風に自分から甘えるなんて何時以来だろう。

「まったく。相変わらず鈍いわね、女の子の気持ちには」

「え？」

「……私だって、寂しかったのよ？」

上目遣いにそんなことを言われ新一は思わず赤面する。

新一は今朝、志保の気持ちをほんの少しでも疑ってしまったことを心の中で謝り志保の背中に腕を廻した。

## 第二十八話

幸せだと感じていた。失恋して傷ついた心を癒やして欲しかったからその優しさにすがりついた。何一つ疑う心は持っていなかった。

それなのに

「誰よ、この人」

決定的な証拠写真を携帯で撮影したのはつい昨日のこと。以前父親から聞いた尾行術を駆使して男が女と会うところを突き止めそこを撮影した。それを今突きつけているところだ。蘭は男がどういう反応を見せるか内心楽しみにしている節もあった。うろたえて自分に許しを乞うだろうか。そうなれば面白い。この機に何か高い物でもせびってやろうか。

まるで子供の様に妙にウキウキした気分を蘭は相手に気づかれないう様に男に聞いた。

「誰よ、この人」

しかし男の反応は蘭の予想とは違った。見たこともないような冷たい目で男は蘭を見ている。そして冷たい口調で言った。

「勘違いするなよ。俺はお前と恋人になった覚えはない。だからお前が浮気だのなんだの言う権利なんかねえんだよ」

蘭は啞然とした。みるみるうちに顔が青ざめていく。手に持っていた携帯も床に落とした。

「悪いけどな、俺にはちゃんとした恋人が居るんだ。ただ最近会えなくてな、色々と溜まってたんだよ。つまりお前はそれを処理する為だけの奴ってことなんだ。それを、恋人面しやがって。こっちはいい迷惑だぜ」

信じられなかった。なぜこんなことになってしまったのか蘭にもわからなかった。

「ほら、わかつたらとっと出てけよ。もうお前は用無しだ」

男の言葉を聞く度に蘭の中に沸々と怒りの感情が湧き上がって来る。憎い。この男が憎い。私の気持ちを踏みにじったこの男がとてつもなく憎い。

蘭はその感情に突き動かされる様に真っ直ぐキッチンへ向かい包丁を手にした。最早、自分で自分を制御することが出来なくなっていた。

男は蘭に背を向けている。蘭はその背中向けて思い切り突進した。蘭の動きは男のうめき声と共に止まり、蘭は床に倒れ込む男を見下ろしていた。

まさか。こんなはずじゃなかった。

「……………あ、あ」

わからない。どうしていいかわからない。目の前では男が苦しそう

にしている。

「…………どう、しよう」

ふと頭に幼なじみの顔が浮かんだ。

## 第二十九話

新一自身何がどうなっているのかさっぱり理解出来なかった。探偵事務所に警視庁の高木から連絡が入ったのは遂十分程前のこと。電話口の新一に重たい口調で高木は言った。

「蘭さんが人を包丁で刺した」

高木がそんな冗談を言う人間ではないことを新一はよく知っている。しかし高木の言っていることが新一には到底信じることが出来なかったし信じたくもなかった。蘭が人を刺した。このあまりにも衝撃的な事態に新一は自分でも驚く程動揺していた。

\*

蘭は交際相手の男性とトラブルを起こした末に男性を包丁で背中から刺した。蘭は現場に到着した警官にそう告げている。因みに警察へ通報したのは蘭本人。電話口で蘭の声はかなり聞き取りにくかったらしいが、応対者がかすかに「人を刺した」という言葉を聞きとったらしく、すぐさま現場へ警官を向かわせた結果事件が発覚したのだった。更に蘭は最初に現場に到着した警官が本庁へ連絡をとっている間の一瞬の隙について、男を刺した包丁で自らの手首を切りつけ自殺を図っている。幸い命に別状はないらしいがかなりの心神耗弱状態にあることは間違いなく現在も病院のベッドの上で意識を覚まさないという。

「高木刑事、蘭が刺した相手は？どうなったんです？」

「ああ、幸い傷は浅かったから一命は取り留めたよ。意識もあるらしい」

「……そうですか」

少なからずほっとした。その時病室から蘭の父親の小五郎が出てきた。

「高木、蘭が刺した相手の男、もう事情聴取は始めてるのか？」

「…ええ。意識も比較的はつきりしていますので」

「……なら、蘭がなんでそんな行為に及んだのか、動機はわかってるのか？」

「それが、男は動機に心当たりがないと言っているんです。ただ、蘭さんが現場に最初に到着した警官にトラブルの末に刺したと言っていたというので、まだ聴取を続けていますが……」

「……そうか」

小五郎はそう言った後その場を立ち去った。二人には声をかける言葉が見つからなかった。

（……蘭、一体どうしてこんなこと）

今、何も出来ない自分が齒がゆい。新一は拳を強く握り締めていた。



## 第三十話（前書き）

三十話突入しました。感想お待ちしてます。

### 第三十話

新一から連絡を受けた志保が病院へやって来た時には既に午後六時を廻っていた。この日志保は仕事が休みであつた為は一人で家に居たと思つていた新一だがどうやらどこかに出掛けていたらしく新一の予想よりずっと早く病院に現れた。

「それで、どうなの？ 蘭さんの様子」

「まだ意識が戻らねえ状態が続いてる。かなり精神的に追い詰められたみてえでな。今は、おっちゃんと妃さんが蘭を見てるよ」

「……………そう。でも、一体なんでこんなことに」

「高木刑事の話だと蘭の奴何か知り合いの男とトラブルを起こしたらしくて、その末の出来事らしい。まあ、詳しい話は蘭の意識が戻ってからだろうな」

「……………蘭さん、逮捕されるの？」

瞬間二人の間に重苦しい空気が漂った。しばらくの沈黙のあと新一が口を開いた。

「……………殺人未遂罪。警察は今、この罪状で逮捕状を請求してる。状況が状況だからな、おっちゃんも妃さんも何も言つてなかったよ」

「……………だったら、少しでも蘭さんの刑が軽くなるように」

「それは、蘭の意識が戻つてからの話だ。今はまだ蘭から事情聴取

が出来ていないから、事件の全容がはつきりしてない。ただ、相手の男の証言だけを考えると、今のところ、情状酌量の余地はないだろうな……」

「……………そんな」

それから新一は全く喋らなくなった。志保はただ新一の隣で終始俯き気味に座っていた。

\*

随分長い間座っていたように思っていたが自らの携帯の着信を知らせるバイブレーションに気付き携帯を見た時、まだ自分が病院に来てから一時間程度しか経っていないことに気付いた。着信相手は友人の春香だ。志保は病院の外に出て応対ボタンを押した。

「もしもし」

『あつ、もしもし志保？どうだった？例のアレ』

事情を知らない春香は随分上機嫌だ。

「……………ああ、アレなら春香の言うとおりだったわよ。今日見てもらったら間違いないって」

『やっぱりね～。で？彼には言ったの？』

「……………いいえ、まだよ」

『えっ、何で？』

「……ちよつと事情があつてね。あつ、でも喧嘩とかじゃないから心配なくていいわよ。いずれはちゃんと言つつもりだから」

『……ふうん。まあ、とにかく早く言わなきゃダメだよ？』

「ええ。わかつてるわ」

『それじゃあね。また明日』

「ええ。また明日」

携帯を閉じ小さく溜め息をついた志保。病院内に戻り先程の場所に戻ったところ新一の姿が見えない。トイレにでも行ったのかと思っていたら、蘭の病室から新一が姿を見せた。

「あつ、志保。戻ってきたか」

「どうしたの？まさか、蘭さんが」

「ああ。目を覚ました」

志保はようやくく少しほつとした様子で小さな笑みを浮かべた。

### 第三十一話

蘭の病室の扉が開き高木刑事が姿を見せた。一時間程前に目を覚ました蘭に、事情聴取をしていたのだ。高木から聞いた話によると相手の男性と蘭は交際関係にあった訳ではないのだという。蘭の方は交際していると思っていたそうだが相手がそうは思っていなかったという少し妙な話なのだが、結局それが原因でトラブルになり蘭は行動に及んだそうだ。

「そんなの、蘭さんの気持ちや踏みにじったその男が悪いんじゃない。蘭さんだけの非じゃないわ」

珍しく感情を露わにして志保が言う。しかし対して新一は冷静だった。確かに蘭がそんな行動に及んでしまった気持ちも決して理解出来ない訳じゃない。しかし、だからといって人を傷付ける行為が正しいとは言えない。犯罪を正当化することは決して出来ないし、罪を犯した者は等しく平等にその罪を償わなくてはならないのだ。

「高木刑事、蘭の様子は？」

「……落ち着いているよ。多分彼女の心の中には、もう覚悟は出来ているんだろうね」

新一と志保は病室へ入った。蘭はベッドに体を起こしている。病室に入って来た新一と志保を見ると申し訳なさそうな表情を見せた。

「ごめんね、新一。志保さん。心配かけて」

「……………蘭さん」

「でも、もう大丈夫だから。心配しないで？」

無理して笑顔を作っているのが手に取るようにわかる。きっと泣きたいはずなのに自分達の前では泣くまいとしているんだろう。

「……………高木刑事、何か言ってたか？」

「……………退院したら、逮捕することになるだろうって」

「……………そうか」

「もう、そんな顔しないでよ。私が悪い事したんだから罰を受けるのは当たり前でしょ？しっかり反省して、すぐに戻ってくるから」

「……………ああ。俺も志保も、皆待ってるからな」

二人の幼なじみは小さく笑った。

\*

「ねえ、もっと一緒に居てあげなさいよ。しばらく会えなくなるのよ？」

病院から帰ろうとする新一に志保が言った。

「蘭にはおっちゃんも妃さんもついてる。大分落ち着いてるみたい

だし、心配ねえさ」

「だけど……………」

「これ以上ここにいても、俺達は何の役にも立たない。それに長く居れば居る程、別れは辛くなるんだ。だから、もう帰ろう」

新一の目にほんの一瞬涙が見えたのを志保は気づかないふりをしていた。志保は新一の手をそっと握り、ゆっくりと歩き出した。

## 第三十二話

新一が志保の妊娠を知ったのは翌日の朝食時のことであつた。新一はその事実の衝撃さに加えて、あまりにも唐突に伝えられたことで思わず飲んでいた茶を吹き出してしまいそうになつてしまった。志保の話だと昨日の内にわかつてはいたらしいのだが状況が状況だつた為言えず、一夜明けた今日伝えることにしたのだという。

妊娠二ヶ月。新一にもちゃんと心当たりはある。ただ二人は今二十歳と二十一という若さだ。新一の中にも志保との結婚という思いはあつたにしろまだ先の話だと思つていたし、行為の時はちゃんと避妊もしていた。が、たった一回それを怠つたことがある。それが今に繋がっているのだ。

新一の反応が予想していたよりも小さかつたので志保は少し不安感を煽られていた。もしかして新一は自らの結婚は望んでいなかったのではないだろうか。そんなことを考え始めると、思考は際限なく広がっていく。

「……………墜ろしたほうが、いい？」

志保が恐る恐る聞いてみた。すると途端に新一はテーブルを強く叩いて立ち上がり怒鳴つた。

「バーロ！！何言つてんだ！！そんなこと、俺が絶対許さねえぞ」

「…………ご、ごめんなさい。ただ、あなたがあんまり嬉しそうじゃないから」

「嬉しくない訳ないだろ？ただ、喜んでばかりもいられないのも事実だ。俺達はまだ二十歳そこそこで大した稼ぎがある訳でもない。」

子供が出来て、ちゃんと養っていけるのかどうか、それを考えてたんだよ」

新一のあまりの剣幕に一瞬たじろいだ志保だが、新一の気持ちを聞けて少しほっとしていた。

「大丈夫。私にも貯金はあるし、やっていけないことはないわ。博士とかにも迷惑はかけられないしね」

「……そうだな」

新一は志保の傍に行きお腹を触ってみる。これからどんどん志保のお腹が大きくなりやがて子供が産まれる。人間の凄さというものを、新一は思い知った気がした。

### 第三十三話

この日米花総合病院には警視庁から捜査員数人が訪れていた。その中には高木渉の姿もある。今日は蘭の退院の日であり、同時に蘭が逮捕される日でもあった。

罪名「殺人未遂罪」。毛利蘭の名が記された逮捕状を持ち高木はゆつくりと蘭の病室へと向かっていた。

\*

「そろそろ、だな」

時計を見た小五郎が静かに言った。高木からの連絡では十時に警視庁の捜査員がここに来るらしい。病室には小五郎や妃英里。鈴木園子や新一達の姿もある。園子に至っては先程から泣きっぱなし。蘭がなんとか宥めている有り様だ。新一も志保も口数は少なかった。

「失礼します」

ドアを数回ノックして高木が入って来た。後ろには他の捜査員の姿もある。高木は蘭に近付き胸ポケットから逮捕状を取り出し蘭の前に広げた。

「毛利蘭さん、殺人未遂容疑で逮捕状が出ています。警視庁までご同行願います」

「…………はい」

蘭は立ち上がり、その両脇に捜査員が立った。捜査員の一人が手錠をかけようとした時高木が「後でいい」と言ったのも彼なりの気遣いであつたのだろう。

蘭が病室を出ると部屋に居た者も皆後に続いた。そして病院前に止まっていた覆面パトカーの後部座席の扉を開け蘭に乘るように捜査員が促した。

「蘭、待つてゐるからな。皆」

乗り際新一がそう言った。蘭は「うん」と返事をして皆に笑顔を見る。

そして蘭が車に乗り込もうとした、その時だった。

「あああああっ!!」

突然女が奇声を発しながらこちらへ走ってきた。手には包丁が握られている。そして女の包丁の矛先は確実に蘭に向いていた。

「蘭さん、危ない!!」

まるで、時が止まってしまったようだった。

「……………し、志保」

崩れるようにして倒れ込む志保。

どこからか、悲鳴が聞こえた気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8368r/>

---

二人の気持ち

2011年10月3日20時39分発行